

第1章 社会学的視点

あなたが米国の100名の人に「なぜカップルは結婚するのか」と訊ねたとしたら、少なくとも90人は「人びとが結婚するのは、恋愛するから」と答えるだろうと考えて間違いない。じっさい、われわれにとって、愛のない結婚が幸福であるとは想像しがたい。同様に、人びとが恋するとき、われわれはかれらが結婚について考えるだろうと予想する。

しかし、だれと結婚するかについての決定は、本当にそれほど単純で、それほど個人的なものだろうか。恋愛が結婚にとって重要であるとしても、キューピットの矢は注意深くわれわれの周りの社会によって向きを決められている。

社会には、だれと結婚すべきでだれと結婚すべきでないかにかんして、多くの「規則」があるという事実を考えてみよう。たとえば、すぐさま、米国社会は同性のだれかと結婚することを禁じる法律によって、人口の半数を除外する(たとえカップルが深く愛し合っていたとしても)。しかし、べつの規則もある。人びと(とくに若い人びと)は、年齢的に近い人と結婚することがとても多く、あらゆる年齢の人びとが典型的には同じ人種のカテゴリーで、類似した社会階級的背景をもち、教育水準が類似していて、同じくらいの身体的魅力をもつ人と結婚することを、社会学者は発見してきた(第18章で詳述する)。じっさい、人びとはだれと結婚するかを選択するが、しかし社会はたしかに人びとが選択するよりまえに、領域を狭めているのである(Gardyn 2002; Zipp, 2002)。

恋愛するときも、その他の生活のほとんどの側面においても、人びとの行う決定は、たんに哲学者が「自由意志」と呼ぶ過程の結果ではない。もっと正確には——そしてこれは社会学の研究から得る本質的な知恵であるが——、われわれの社会的世界は、われわれの行為と生活選択を誘導する。それはちょうど、季節がわれわれの服装や活動に影響をおよぼすのと同じようである。

社会学的視点

社会学とは、人間社会にかんする体系的な研究である。社会学の核心にあるのは、「社会学的視点」と呼ばれる独特の観点である。

特殊なものの中に一般的なものを見る

ピーター・バーガー(1963)は、社会学的視点とは特殊なものの中に一般的なものを見ることだと述べた。これによって、かれは、社会学者たちが特定の人びとの行動に一般的なパターンを追求することを意味していた。各々の個人は独特のものではあるものの、社会はその成員の生活をかたちづくる(米国の人びとは、たとえばパキスタンの村落地方の伝統的な村で暮らす人びとよりも、愛が結婚に関係すると予想することがずっと多い)。くわえて、いかなる社会も、さまざまなカテゴリーの人びと(たとえば、男性と女性、貧

困者と富裕者、大人と子ども)にそれぞれ異なった作用をする。たとえば、女性の結婚への希望にかんする古典的な研究で、リリアン・ラビン (Rubin 1976) は、典型的にいて、高所得の女性が結婚相手の男性に期待することは、他者に敏感であること、話しやすいこと、そして感情と経験を分かち合えることであるという発見をした。彼女の研究において低所得の女性のほとんどは、これとは対照的に、あまり飲み過ぎず、暴力を振るわず、安定した仕事をもっている男性を探していた。明らかに、女性が結婚相手に期待できると考えることは、社会階級上の位置と深く関連している。もっと一般的には、恵まれた社会的背景をもつ人びとは、自分たちの生活についてずっと自信をもち、楽観的になりがちである。かれらがより多くの機会をもっており、またその機会を利用するだけの訓練と技能をもっていることを理解すれば、それは驚くにあたらない。われわれは、自分たちの生活している社会——およびその社会のなかで自分たちが当てはまる一般的なカテゴリー——が自分たちの特殊な生活経験をどのようにかたちづけているかを理解することによって、社会学的に考えはじめている。

なれ親しんだもののなかに奇妙なものを見る

最初は、社会学的視点をつかうと、なれ親しんだもののなかに奇妙なものを見ることになる。もしある人が他の人に「あなたは適切な社会的カテゴリーにぴったりだ。つまり、あなたはすばらしい夫になるだろう」と言ったとしたら、われわれみんなが奇妙なことと感じるだろう。要するに、社会学的に見るということは、われわれがなにを決定するかとの関連でわれわれが自分の生活を送っているというなれ親しんだ考えに挑戦し、その代わりに社会がわれわれの経験をかたちづけているという最初は奇妙に思える観念を考察することである。

個人主義的な北米人にとって、社会がわれわれにどのような影響をおよぼしているかを理解するようになるには、少し訓練が必要であるかもしれない。もしだれかが、なぜあなたは特定の大学に入学することを「選んだ」のかと訊ねたとすれば、あなたはつぎのような理由のうちのひとつを答えとするかもしれない。

「私は家に近いところにしたかったから」

「私はバスケットボールで特待生になったから」

「この大学でジャーナリズムの学位をとれば、良い職に就けるから」

「私のガールフレンドがこの学校に通っているから」

「本当に入りたかった学校には入れなかったから」

そのような答えは、本当かもしれない。しかし、それらは話の全体を語っているのだろうか。

大学に通うことを社会学的に考えると、われわれはまず、世界中で、100人中約5人しか大学の学位を取っていないことに気づくかもしれない。米国でさえ、1世紀まえまでは、大学に通うことはほとんどの人びとにとって選択肢ではなかった。こんにち、教室を見渡してみると、社会の諸力がまだ大学に通うことに関係していることがわかる。典型的には、

米国の大学生は、若く、一般的には 18 歳から 24 歳である。なぜだろうか。それは、われわれの社会において、大学に通うことが人生のこの時期と結びつけられているからである。しかし、年齢以上のものが関係している。なぜなら、すべての若い男女の半数以下しかじっさいに大学に入れないからである。

もうひとつの要因は、費用である。高等教育は金がかかるから、学生たちは平均以上の所得のある家族の出身者となりがちである。第 20 章（「教育」）で説明するように、もしあなたが年間 7 万 5 千ドル以上の所得のある家族に属しているくらい幸運であるなら、2 万ドル未満の所得しかない家族の一員である者にくらべて、大学に進学する可能性が 3 倍になる。これらのデータに照らしてみると、大学に進学することがたんに個人の選択の問題だと考えることは、理にかなっているのだろうか。

社会的文脈のなかで個性を見る

個人の選択をかたちづくる社会の力を理解するために、女性もつ子どもの数について考えてみよう。米国では、4 頁の世界地図 1-1 に示されているように、女性は平均して一生に 2 人をわずかに下回る数の子どもを持つ。しかし、インドでは、その平均は約 3 人である。南アフリカでは約 6 人、そしてニジェールでは、約 7 人である。

なぜこのような著しい違いがあるのだろうか。のちの諸章で説明するように、貧困諸国の女性は、学校にあまり行かず、経済的な機会が少なく、自宅にすることが多く、避妊法を用いることが少ない。明らかに、社会は、女性と男性が子育てについて行う決定におおいに関係している。

社会の力がわれわれの最も私的な選択でさえかたちづくっていることを示すもうひとつの例は、自殺の研究から得られる。みずからの命を絶つこと以上に個人的な選択があるだろうか。しかし、社会学のパイオニアのひとりであるエミール・デュルケム（1858-1917）は、自殺という見方には孤立した行為にさえ、社会の諸力が働いていることを示した。

かれの母国であるフランスの公式統計を検討して、デュルケムは、あるカテゴリーの人びとが他の人びとよりも自殺しやすいことを見いだした。かれは、男性、プロテスタント、裕福な人びと、そして未婚者が、女性、カトリックとユダヤ教徒、貧困者、そして既婚者よりも自殺率がかなり高いことに気がついたのである。デュルケムは、その違いを社会への統合との関連で説明した。つまり、強い社会的絆をもつ人びとのカテゴリーは自殺率が低い、もっと個人主義的な人びとのカテゴリーは自殺率が高い。

デュルケムが研究していたのは、男性が支配的な社会であった。そうした社会では、男性は女性よりもたしかに自由が多い。しかし、その有利さにもかかわらず、自由は社会的絆を弱め、自殺のリスクを押し上げる。同様に、もっと個人主義的であるプロテスタントは、伝統に縛られたカトリックやユダヤ教徒よりも自殺しやすい。カトリックとユダヤ教徒の儀礼は、より強い社会的絆を育むのである。富裕者は貧困者よりも自由が多いが、しかし、ここでも、より高い自殺率という代償を払っている。最後に、独身者が既婚者よりも自殺のリスクが大きいのはなぜか、理解できるだろうか。

1 世紀後、デュルケムの分析は依然として当てはまっている（Thorlindsson and Bjarnason 1998）。図 1-1 は、米国人の 4 カテゴリー別自殺率を示している。自殺はとてままれであ

ることを思い起こそう。人口 10 万人あたり 10 人という率は、およそ 1 マイルあたり 4 インチである。それでも、ある興味深いパターンが明らかになる。2000 年に、白人 10 万人あたりの記録された自殺は、11.7 であり、アフリカ系アメリカ人 (5.6) の約 2 倍であった。双方の人種について、自殺は女性よりも男性に多かった。白人男性 (19.1) は白人女性 (4.5) の 4 倍以上自殺しやすかった。アフリカ系アメリカ人のあいだでは、男性の率 (9.8) は、女性 (1.8) の 6 倍高かった。デュルケムの論理によれば、白人と男性のあいだの自殺率の高さは、富と自由が多いことを反映している。女性とアフリカ系アメリカ人の自殺率が低いのは、かれらの社会的選択が限られているからである。それゆえ、デュルケムの時代と同じように、われわれは、特定の諸個人の個人的行為に一般的なパターンを見ることができる。〔2000 年に、日本に住む日本人の自殺率は、人口 10 万人あたり 24.1 人であった。男性は 35.2、女性は 13.4 であった。平成 12 年厚生労働省人口動態調査〕

グローバルな視点の重要性

12月10日 フェズ、モロッコ。この中世都市——狭い通りや路地の網の目——は、遊んでいる子どもや、ヴェールをまとった女の沈黙や、商品を積んだロバをひく男の凝視で満たされていた。フェズは数世紀間ほとんど変わっていないように思われた。ここ、アフリカ北西部は、ヨーロッパのもっとなじみのあるリズムから数百マイルしか離れていない。しかし、この場所は、千年も離れているように思われる。このような冒険をしたことはなかった。故郷についてこれほど考えたことはなかった。

新しい情報技術のおかげで地球上の最も離れたところできえたがいに近くにひきよせられるので、多くの学問分野はグローバルな視点をとりつつある。グローバルな視点とは、より大きな世界とそこにおけるわれわれの社会の位置を研究することである。社会学にとってグローバルな視点の重要性はなんだろうか。

第 1 に、グローバルな認識は、社会学的視点の論理的な拡張である。社会学がわれわれに示しているのは、社会におけるわれわれの位置によって、われわれの生活経験は深く影響されるということである。それゆえ、より大きな世界システムにおけるわれわれの社会の位置によって、米国にいるすべての人びとが影響をうける、というのもっともなことである。コラムでは、世界の社会的なかたちとそのなかでの米国の位置を示すために「グローバルな村」について述べている。

6 頁の世界地図 1-2 は、世界の諸国の相対的な経済的発展についてのビジュアルなガイドをあたえている。高所得国は、ほとんどの人びとが相対的に高所得であるたいへん生産性の高い経済システムをもつ国である。40 の高所得国には、米国とカナダ、アルゼンチン、西欧諸国、南アフリカ、イスラエル、サウジアラビア、日本、そしてオーストラリアがふくまれる。これらの国々は、いっしょにすると、世界の財とサービスのほとんどを生産し、富のほとんどを支配している。平均して、これらの国々の諸個人は、良い生活をしているが、それはかれらが他の人びとよりも賢いからではなく、世界の豊かな地域に生まれたという幸運があったからである。

世界の**中所得国**とは、人びとの所得がだいたい世界の平均である生産性が中間的な経済システムをもつ国である。およそ 90 のそうした国々——東欧諸国のほとんど、アジアの多く、アフリカの一部、そしてラテンアメリカのほとんど——に住む人びとは、都市だけでなく地方の村にも住んでいることが多い。自動車を運転するのと同じように、徒歩あるいはトラクター、スクーター、自転車、あるいは動物にも乗っている。そして、平均して、わずか数年の学校教育を受けるだけである。ほとんどの中所得諸国は、また、社会的不平等によっても特徴づけられており、極端に富裕な人びと（たとえば、北アフリカ諸国のビジネスエリート）もいるが、もっと多くの人びとが安全な住宅や適切な栄養を欠いている。

最後に、世界人口の約半数が 60 の**低所得国**に住んでいる。低所得国とは、ほとんどの人びとが貧困である生産性の低い経済システムをもつ国である。世界地図 1-2 が示しているように、世界の最貧国のほとんどは、アフリカである。ここでもまた、少数の人びとはとても裕福であるが、大多数は、貧しい住宅、不衛生な水、少なすぎる食糧、限られた衛生施設、そしてことによると最も深刻なことに、生活を向上させる機会がほとんどないなかでなんとか生活している。

第 12 章（「グローバルな階層」）では、グローバルな富と貧困の原因と結果について詳しく述べる。しかしこの教科書のどの章でも、われわれ自身の国境を越えた世界における生活を際立たせる。それは 4 つの理由からである。

1. われわれがどこに住んでいるかは、われわれの生活をかたちづくるのに大きな違いを生む。

世界地図 1-1 を見ればわかるように、女性の人生は、富裕国と貧困国とで著しく異なっている。われわれ自身を理解し、他の人びとの生活を理解するために、われわれは世界の社会的景観を把握しなければならない。これは、この教科書全体を通じてみられる 30 の世界地図に注意を払うもっともな理由である。

2. **世界中の社会は、ますます相互に関連している。**歴史的にみて、米国はそれ自身の国境を越えた諸国の経過音にすぎない。しかしながら、近年の数十年間に、米国とその他の世界は、かつてないほど結びつくようになった。電子技術はいまや世界中の音声、画像、書かれた記録を一瞬にして伝達している。

新しい技術のもたらしたひとつの結果は、のちの章で説明するように、世界中の人びとがいまや食品、衣服、そして音楽の多くの好みを共有していることである。経済的な影響力のために、米国のような高所得諸国は、他の国々に影響をおよぼしている。それらの国々の人びとは、熱心に米国のハンバーガーをほおぼり、ポップミュージックで踊り、ますます英語を話すようになっていく。

われわれが自分たちの生活様式を世界中に広げているように、より大きな世界もまたわれわれに影響をおよぼしている。約百万人の登録された移民が毎年、米国に入ってきて、かれらのファッションと食品をわれわれの陸地にもたらし、そのためにわれわれの国の人種的・文化的多様性をおおいに増大させている。

国境を越えた通商は、グローバル経済も生みだした。大企業は、世界規模で財を生産し販売している。そして衛星通信によって結びつけられたグローバルな金融市場は、24 時間、稼働している。ニューヨークにいる株のトレーダーは、東京と香港の金融市場を追い

かけ、同様に、アイオワ州の小麦農家は、旧ソ連のグルジア共和国の穀物価格を注意深く見ている。米国の新しい仕事の 8 割は、国際取引に関係しており、グローバルな理解がこれほど重要になったことはかつてなかった。

3. 米国でわれわれが直面する多くの問題は、他の場所ではもっと深刻である。貧困は、米国で深刻な問題である。しかし、第 12 章（「グローバルな階層」）で説明するように、貧困は、ラテンアメリカ、アフリカ、そしてアジアで、もっとありふれており、もっと深刻である。同様に、米国で女性は男性よりも社会的地位が低いものの、ジェンダーの不平等は、世界の貧困諸国ではもっと大きい。

4. グローバルに考えることは、われわれ自身をもっとよく知るための良い方法である。われわれは、遠く離れた都市の街路を歩いているときほど、米国で生活することがなにを意味するのかを鋭く意識することはない。たとえば、第 12 章で、われわれはインドのマドラスにある不法占拠地区を訪れる。そこは、基本的な物質的財が欠乏しているにもかかわらず、人びとは、家族の成員の愛とサポートでなんとか暮らしている。それならばなぜ、米国の貧困は、孤立と怒りに結びついているのであろうか。物質的な快適さは——われわれの「裕福な」生活の定義にとって重要だが——、人間の幸福を測定するのに最も良い方法なのだろうか。

要するに、ますます世界が相互に結びつきを強めていくなかで、われわれは他者を理解するかぎりにおいてのみ、自分自身を理解することができる。

コラム: グローバル社会学*****

グローバルな村——われわれの世界の社会学的スナップ写真

地球は、192 カ国の都市と農村に暮らす 64 億の人びとの故郷である。世界の社会的形状をつかむために、しばらくのあいだ、地球の人口が千人のひとつの定住地に縮小していると想像してみよう。この「グローバルな村」において、住民の半数以上（610 人）はアジア人である。そこには、210 人の中華人民共和国市民もふくまれている。つぎに、数の点では、130 人のアフリカ人、120 人のヨーロッパ人、85 人のラテンアメリカとカリブ海出身者、5 人のオーストラリアと南太平洋の出身者、そして米国人の 45 人をふくむわずか 50 人の北米人を見いだすであろう。

居住地の生活様式にかんする研究は、いくつかの驚くべき事実を明らかにしている。この村は、一見したところ無限の財とサービスを売りに出すことができる豊かな場所である。しかし、ほとんどの住民は、そのような財宝を夢見ているだけである。なぜなら、村の総収入の 80 パーセントは、わずか 200 人によって稼ぎ出されているからである。

多数派にとって、最大の問題は十分な食糧をえることである。毎年、村の働き手は、各人を食べさせるのに十分すぎるだけを生産する。そのばあいさえ、村人の半分は、ほとんどの子どももふくめて、十分な食事をしていない。そして、多くがおなかをすかせて眠りにつく。最も貧しい200人の住民は（村で最も豊かな人よりも持っている金が少ない）、清浄な飲み水も安全な住宅も欠いている。体が弱くて働くことができないために、毎日、命を脅かす病気に犠牲になっている人びともいる。

村人は自分たちのコミュニティに、良い大学をふくめ多くの学校があることを誇りにしている。約50人の住民は、学士の学位を持っているが、村人のほぼ半数は読み書きができない。

米国は、平均して、このグローバルな村で最も豊かな人びとのなかにいる。われわれは良い暮らしをしていると考えているものの、社会学的視点は、われわれに、自分たちの業績が世界規模の社会システムのなかでわが国が保持している特権的な位置の産物であることを思い出させてくれる。

（出典：Population Reference Bureau（2002）およびUnited Nations Development Programme（2002）のデータをもとに、筆者が計算）

社会学的視点を適用する

われわれが自分たちとは異なる人びとに出会う場合——世界のなかでも、自分の住んでいる町のなかでも——、社会学的視点を適用することは容易である。なぜなら、かれらは、社会が個人の生活をかたちづくることを思い起こさせてくれるからである。しかし、ふたつのべつの種類の状況もまた、われわれが社会学的視点で世界をみるのを助けてくれる。社会の周辺に生活することと、社会的危機を生き抜くことである。

社会学と社会の周辺性

ときどき、だれもが「部外者」であると感じる。しかしながら、あるカテゴリーの人びとにとって、部外者であること——支配的集団の一部でないこと——は、毎日の経験である。人びとの社会的周辺性が大きければ大きいほど、かれらはより良く社会学的視点を用いることができる。

たとえば、米国で、人種の重要性を理解せずに成長するアフリカ系アメリカ人はいない。しかし、支配的な多数派である白人の人びとは、人種について考えることが少なく、それは自分たちではなく有色人種のみに影響のあることと信じている。女性、同性愛者、障害者、そして高齢者もまた、ある程度、「部外者」である。社会生活の周辺にいる人びとは、他の人びとがめったに考えない社会的パターンに気づいている。社会学的視点をよりうまくつかえるようになるためには、われわれは、なじみ深い決まりきった日課から一歩退い

て、新しい意識と好奇心をもって生活を眺めなければならない。

社会学と社会的危機

変動や危機の時期は、だれもがいくらかバランスを欠いているように感じ、社会学的視点をを用いるようにながされる。C・ライト・ミルズ（1959）は、この考えを 1930 年代の大恐慌を用いて説明した。失業率が 25 パーセントまで急上昇したので、失業している人びとは、自分たちの特殊な生活のうちに一般的な社会的諸力が作用していると考えざるを得なかった。「私になにか悪いところがある。だから、仕事が見つからない」というのではなく、かれらは社会学的アプローチをとって、「経済が崩壊したから、仕事が見つからない」ということを悟った。

社会変動が社会学的思考を育てるのと同じように、社会学的思考は社会変動をもたらす。「システム」がどのように作用するのかを学べば学ぶほど、われわれはなんらかの方法でそれを変えたいくなるかもしれない。たとえば、ジェンダーの力を自覚するようになると、多くの女性と男性は、積極的に、伝統的なジェンダー役割の違いを減少させようとしてきた。

要するに、社会学への入門とは、社会生活の見慣れたパターンを新しい方法で見ることを学ぶことへの招待である。しかし、この招待は受けるに値するものなのだろうか。社会学的視点を適用することによって得られる利点とはなんであるのか。

社会学的視点の利点

社会学的視点をわれわれの日常生活に適用することには、つぎの 4 つの利点がある。

1. **社会学的視点は、「常識」の真実を評価するのを助ける。** われわれは多くのことを自明のことと考えているが、だからといってそれが真実になるわけではない。ひとつの良い例として、われわれは自分自身の生活に個人的に責任をもつ自由な個人であるという観念が挙げられる。もし、人びとが自分自身の運命を決定していると考えるのであれば、われわれはただちに、特別に成功した人びとを優秀であると賞賛し、それほど成功してない他の人びとを個人的に欠陥があると考えられるかもしれない。これとは対照的に、社会学的アプローチは、共通にいだかれている信念がじっさいに真実であるのかどうかを問い、それが真実でないのであれば、なぜ人びとは広くそう信じているのかを問うように奨励する。

2. **社会学的視点は、われわれが自分たちの生活の機会と制約を理解するのを助ける。** 社会学的な思考は、人生というゲームにおいて、われわれが自分たちのカードをどうつかうかについては発言権があるものの、そのカードを配っているのは社会であることを理解するように導く。われわれがゲームを理解すればするほど、われわれはより良いプレイヤーになる。社会学は、われわれの世界を「見極める」のを助け、その結果、われわれが自分たちの目標をもっと効果的に追求することができるようになる。

3. 社会学的視点は、社会のなかで積極的な参加者となるようにわれわれを力づける。われわれが社会の作用について理解すればするほど、われわれは積極的な市民になる。ある人びとにとって、それは現状の社会を支持することを意味するかもしれない。べつの人びとは、なんらかの方法でまさしく世界全体を変化させようと試みるかもしれない。社会生活のどの側面を評価するにも、あなたの目標がなんであろうと、社会的諸力を確認し、その結果を評価することが必要となる。コラムでは、C・ライト・ミルズが社会学的視点をを用いることの力について述べている。

4. 社会学的視点は、多様な世界でわれわれが生活する助けとなる。北米人は世界人口のたった5パーセントを代表するにすぎない。そして、本書ののちの章で説明するように、他の95パーセントの多くは、われわれとは非常に異なった生活をしている。それでも、他のあらゆる場所の人びとと同じように、われわれは自分自身の生活様式を「正しい」「自然な」「より良い」ものと定義しがちである。社会学的視点は、われわれ自身の生活様式もふくめて、あらゆる生活様式の相対的な強さと弱さについて、批判的に考えるようにうながす。

コラム: 社会学の応用*****

社会学的想像力——個人的な問題を公共的な争点に転換する

社会学的視点の力は、個人の生活を変えるだけでなく、社会を転換させるところにある。C・ライト・ミルズが見ていたように、人びとの個人的な失敗ではなく、社会が貧困やその他の社会問題の原因である。社会学的想像力は、個人的問題を公共的な争点に転換させることによって、人びとを結束させ、変化を生み出す。

以下の引用で、ミルズは社会学的想像力の必要性について説明している。

社会が工業化されるとき、農民は労働者になり、封建領主は消滅するか、事業者になる。階級が台頭したり衰退したりするとき、人は雇用されたり失業したりする。投資率が上がったたり下がったりすると、人は元気になったり破産したりする。戦争が起こると、保険のセールスマンは、ロケット発射兵となり、店の事務員はレーダー操作員になる。妻は孤独に暮らす。子どもは父親なしで育つ。個人の生活も社会の歴史も、両者を理解することなくして理解できない。

しかし、ひとは通常、自分たちが耐えている苦難を、歴史的変化との関連で定義してはいない。...かれらが享受する幸福を、かれらは通常、自分たちが住んでいる社会の浮沈のせいにはしない。かれら自身の生活パターンと世界史のコースとの複雑な関係にめったに気づくことなく、通常の人、この結びつきが自分たちがなろうとしている人間の種類と、かれらが参加するかもしれない歴史形成の種類に、どのような意味をもつのかを、通常は知らない。かれらは人と歴史との相互作用、個人の伝記と歴史との、自己と世界との、相互作用を把握するのに重要な精神の資質を有しない。

かれらが必要としているのは、...世界になにが起こっているのかということと、...自分自身になにが起こることになるのかということを理解する助けとなるような精神の

資質である。...そうした精神の資質を、...社会学的想像力と呼んでもよいかもしれない。

社会学、政策、そして職業経歴

社会学の利点は、個人の成長以上のものである。社会学者は、無数の点で、公共政策と法律の形成を助けてきた。そのなかには、学校の人種統合、バス通学、ポルノ規制、社会福祉などがある。たとえば、レノア・ウェイツマン（1985）が離婚後の女性の経済的困難について行った研究は、「公共政策に現実的な影響をおよぼし、カリフォルニア州で14の新しい法律を通過させる結果となった」（Weitzman 1996: 538）。

社会学を勉強したという経歴は、また、仕事の世界にも良い参加をもたらす。アメリカ社会学会は、社会学者が、広告、銀行業務、司法、教育、政府、保健、広報、調査のような分野の無数の仕事に雇用されていると報告している（Billson and Huber 1993）。

学士を超えて、社会学のより上の学位を取得したほとんどの男性と女性は、教育と研究の職歴を追求している。しかし、ますます多くの専門的社会学者があらゆる種類の応用分野で仕事をしている。たとえば、臨床社会学者は、臨床心理学者と同じくらい、困難をかかえた患者を相手に仕事をしている。基本的なちがいは、心理学者が個人に焦点をあてるのにたいして、社会学者は問題をその人をめぐる社会関係の網の目に位置づけることである。応用社会学のもうひとつのタイプは、評価研究である。こんにちの費用を意識する風潮のなかで、行政官は事実上あらゆる種類の政策の有効性を評価しなければならない。とくに先進的な調査技能をもった社会学者にたいしては、この種類の仕事への需要がたくさんある（Deutscher 1999）。

社会学の起源

個人による「選択」と同じように、主要な歴史的イベントもめったに「偶然生じる」ことはない。社会学の誕生は、それじたい強力な社会的諸力の結果であった。

社会変動と社会学

18世紀と19世紀の衝撃的な転換が、ヨーロッパ社会を大きく変えた。3つの変化が、社会学の発展にとってとくに重要である。工場を基礎とする工業経済の勃興、都市の爆発的成長、そして民主主義と政治的権利についての新しい考えである。

新しい工業経済

ヨーロッパ中世の時代に、ほとんどの人は、家の近くで畑を耕すか、小規模のマニユファクチュア（「手でつくる」という意味のラテン語に由来する言葉）に従事していた。しかし、18世紀の末までに、発明家は新しいエネルギー源——水力とのちには蒸気力——

を用いて、工場で大きな機械を動かした。自宅や緊密な集団のなかで働く代わりに、労働者は大規模で匿名的な労働力の一部となり、工場を所有する見知らぬ人のために苦勞して働いた。この生産システムの変化が家族をバラバラにし、何世紀ものあいだコミュニティ生活を支配していた伝統を弱体化させた。

都市の成長

ヨーロッパじゅうで、工場は仕事を必要としている人びとを引き寄せた。この「プル」とともに、困い込み運動という「プッシュ」がやってきた。土地所有者は、ますます多くの土地を困い込み、農地を羊の放牧地にした。羊は、繁榮している織物工場のための羊毛のもとであった。土地を失った無数の借地農が、新しい工場に仕事を求めて田舎を離れた。

都市が前例のない規模に成長すると、新しい都市住民は山積する社会問題に取り組んだ。汚染、犯罪、ホームレスなどである。見知らぬ人が密集している街頭で生活して、かれらは新しい、非個人的な社会的環境に適応した。

政治変動

中世の時代に、人びとは社会を神の意志の表れであるとみなした。王権は「神聖な権利」による支配を主張し、各人は社会的階梯の上下に位置づけられて、神聖な計画のなかで役割を果たした。社会にかんするこの神学的な見解は、「すべては輝き美しく」という古い聖公会の聖歌〔573番〕の一節に謳われている。

富める者は城にあり、
貧しき者は門にあり、
神はかれらを上下に創り賜い、
身分に並べ賜う。

しかし、経済的発展と都市の急速な成長は、ただちに新しい政治的観念をもたらした。1600年ごろには、伝統は猛烈な攻撃にさらされた。トマス・ホッブス（1588-1679）、ジョン・ロック（1632-1704）、そしてアダム・スミス（1723-1790）の著作のなかに、神と自分たちの支配者にたいする人びとの道徳的義務から、人びとは自己利益を追求すべきであるという考えへの焦点の変化がみてとれる。新しい政治的風土のなかで、哲学者は個人の自由と個人の権利について主張した。ロックに共鳴して、われわれ自身の独立宣言〔アメリカ独立宣言〕は、すべての人が「生命、自由、幸福追求」をふくむ「ある一定の不可侵の権利」を有していると主張している。

1789年にはじまったフランス革命は、さらにこの政治的・社会的伝統の劇的な破壊を例証している。フランスの社会分析家である、アレックス・ド・トックビル（1805-1859）は、フランス革命によってもたらされた社会における変化は、「人類全体の再生にほかならない」となったと宣言した（1955:13; org. 1856）。

社会についての新しい意識

巨大な工場、爆発する都市、個人主義という新しい精神——これらの変化があいまって、

人びとは、自分たちをとりまく環境について意識するようになった。社会という地面が人びとの足元で揺らいでいたので、社会学という新しい学問分野が、英国、フランス、ドイツで誕生した。それらは、まさにこの変化が最も大きい場所であった。

科学と社会学

そして、社会を見る新しい方法を記述するために 1838 年に社会学という用語をつくったのは、フランスの社会思想家オーギュスト・コント（1798-1857）であった。社会学は、最も若い学問分野のなかのひとつである。たとえば、歴史学、物理学、あるいは経済学よりもずっと新しい。

もちろん、コントは社会の性質を熟考した最初の人ではなかった。社会的世界の作用について、古代文明の輝かしい思想家たちが魅せられていた。そのなかには、中国の哲学者孔子（551-479 B.C.E）、ギリシアの哲学者プラトン（c. 427-347 B.C.E）とアリストテレス（384-322 B.C.E）がふくまれる。数世紀後、ローマ皇帝マルクス・アウレニウス（121-180）、中世の思想家聖トマス・アクィナス（c. 1225-1274）とクリスティーヌ・ド・ピサン（c. 1363-1431）、そして英国の劇作家ウィリアム・シェークスピア（1564-1616）がこの問題を取り上げた。

しかし、これらの思想家たちは、じっさいの社会を分析することよりも、理想的な社会を証明することに興味をもっていった。対照的に、コントとその他の社会学のパイオニアは、社会がいかに向かうかを気にかけてはいたものの、主要な目標は社会がじっさいにどのように作動しているかを理解することであった。

コント（1758; orig. 1751-54）は、社会学を三段階の歴史発展の産物であると考えた。初期の神学的段階である人類史のはじまりから 1350 年ごろのヨーロッパ中世の終わりまでは、人びとは社会にかんして宗教的見解をいただき、社会を神の意志の表現であるとみなしていた。

ルネッサンスとともに、神学的アプローチは、コントの言う歴史の形而上学的段階に道を譲った。この時期に、人びとは社会を超自然的な現象というよりも自然的な現象として理解した。たとえば、トマス・ホッブズ（1588-1679）は、社会は神の完全性を反映するものというよりも、利己的な人間性の失敗を反映するものであると考えた。

コントが歴史の科学的段階〔正しくは実証的段階〕と呼んだものは、ポーランド人の天文学者コペルニクス（1473-1543）、イタリアの天文学者にして物理学者であるガリレオ（1564-1642）、そして英国の物理学者にして数学者であるニュートン（1642-1727）のような初期の科学者の研究からはじまった。コントの貢献は、最初に物理的世界の研究に用いられた科学的アプローチを、社会の研究に適用することにあつた。

こうして、コントは、**実証主義**を好んだ。それは、科学にもとづいて理解する方法と定義される。実証主義者として、コントは、物理的世界が重力その他の自然法則にしたがって作動するのと同じように、社会が不変の法則にしたがうと信じていた。

20 世紀の初めに、社会学は、コントの考えに強い影響をうけて、米国で学問分野として出現した〔アメリカ社会学が、コントから直接の影響をうけていたとは考えにくい。むしろはじめはスペンサー、のちにジンメルの影響が強かった〕。こんにち、ほとんどの社会学

者は、依然として、科学は社会学の重要な一部であると考えている。しかし、第2章（「社会学的調査研究」）で説明するように、われわれはいまでは、人間の行動が惑星の運動や他の生物の行動とくらべても、ずっと複雑であることを理解している。人間は想像力と自発性のある生き物であるから、われわれの行動は、いかなるしっかりした「社会の法則」によっても完全には説明できない。くわえて、カール・マルクス（1818-1883）のような初期の社会学者は——かれの考えについては第4章（「社会」）で論じる——、新しい産業社会の顕著な不平等に悩んでいた。かれらは社会学という新しい学問をたんに社会を理解するためだけでなく、社会正義にむかう変化をもたらすためのぞんでいた。

ジェンダーと人種——周辺の声



ハリエット・マーティノー



ジェーン・アダムズ

<http://www.bolender.com/Sociological%20Theory/Sociological%20Theorists.htm>

オーギュスト・コントとカール・マルクスは、社会学の巨人のなかにいる。しかしながら、近年、われわれは、他の人びと——かれらのジェンダーや人種のゆえに社会の周辺に押しやられた人びと——の果たした重要な貢献を知るようになった。

ハリエット・マーティノー（1802-1876）は、英国の裕福な家族に生まれ、オーギュスト・コントの著作を、フランス語から英語に翻訳したことによって、最初に有名になった。その後、彼女は自分自身の研究で著名な学者になった。彼女は、奴隷制の害悪を暴露し、工場労働者を保護し、女性の地位を向上させる法律のために意見を述べた。

米国では、ジェーン・アダムズ（1860-1935）が社会学のパイオニアであった。ソーシャルワーカーとしての訓練を受けたアダムズは、毎年百万人の割合で米国に入ってきていた移民のために意見を述べた。1889年に、アダムズはハルハウスを設立した。これはシカゴにあるセツルメント・ハウスで、移民の家族に援助を提供していた。彼女はまた、社会学者と政治家を集めて、当時の都市問題について議論した。移民のために働いたことにたいして、アダムズは、1931年にノーベル平和賞を受賞した。

米国における人種を理解するのに重要な貢献をしたのは、もうひとりの社会学のパイオニアであるウィリアム・エドワード・バークハート・デュ・ボイス（1868-1963）であった。マサチューセッツの貧しい家族に生まれたデュ・ボイスは、テネシー州ナッシュビルのフィスク大学に入学し、その後、ハーバード大学に入学した。そこでかれは大学から有色人種としては最初の博士号を取得した。マーティノーやアダムズと同様に、デュ・ボイスは、社会学者は社会問題を解決する試みをすべきであると信じていた。それゆえかれは、黒人コミュニティを研究し（1899）、人種的不平等に反対する意見を述べ、全米黒人地位向上協会（NAACP）の創立メンバーとして勤務した。

女性とアフリカ系アメリカ人の劣等性についての広く普及した信念のために、マーティノ、アダムズ、そしてデュ・ボイスは、社会学の周辺にとどめられていた。社会学的なまなざしで振り返ると、われわれは、いかに社会の諸力が社会学の歴史それ自体をかたちづくるのにも作用していたかを理解することができる。

社会学理論

観察を理解に織り込むと、社会学のもうひとつの側面がもたらされる。理論である。理論とは、特定の事実がどのように、なぜ、関係しているかにかんする言明である。社会学理論の仕事は、現実の世界の社会行動を説明することである。社会的統合度の低い人びとのカテゴリー（男性、プロテスタント、富裕層、そして未婚者）が、とくに自殺しやすいというエミール・デュルケムの理論を思い起こそう。デュルケムは、自殺の問題について熟考したので、数々のありうる理論を考察した。しかしどれが正しかったのだろうか。

理論を評価するためには、次章で説明するように、社会学者はさまざまな科学的調査の方法を用いて証拠を集める。調査によって、社会学者は、ある理論を確かめたり、他の理論を棄却したり修正したりできる。したがって、デュルケムは、あるカテゴリーの人びとが自殺しやすいことを示すパターンが見られるデータを集めた。これらのパターンによって、デュルケムは、あらゆる利用可能な証拠に最も良く一致する理論を決めることができた。14 頁の全国地図 1-1 は、50 州それぞれの自殺率を示したもので、あなた自身の理論づくりのための機会をあたえている。

社会学者は、理論を構築するにあたって、ふたつの基本的な問題に直面する。どのような問題を研究すべきか。事実をどのように結びつけるべきか。社会学者がこれらの問題にどのように答えるかは、かれらの理論的な「案内図」つまりパラダイムに左右される (Kuhn 1970)。理論パラダイムとは、思考と研究をみちびくような、社会についての基本的イメージである。社会学は、3 つの主要なアプローチをもっている。構造機能パラダイム、社会的闘争パラダイム、そしてシンボリック相互作用パラダイムである。

構造機能パラダイム

構造機能パラダイムとは、社会を、その部分が協働して連帯と安定性を促進する複雑なシステムと見なす理論を構築する枠組みである。その名前が示唆しているように、このパラダイムは、社会構造を指摘する。社会構造とは、社会行動の相対的に安定したパターンを意味している。社会構造は、われわれの生活にかたちをあたえる。それが家族のなかであろうと、職場のなかであろうと、教室のなかであろうと。第 2 に、このパラダイムは、構造の社会的機能を探求する。社会的機能とは、社会全体の作用への帰結である。あらゆる社会構造は、たんなる握手から複雑な宗教的儀式まで、社会を少なくとも現状のまま進行させるために機能する。

構造機能パラダイムは、オーギュスト・コントに多くを負っている。かれは、急速な変化の時代に社会統合の重要性について指摘した。エミール・デュルケムは、フランスの大

学で社会学を確立させるのを助けたが、かれもまた、自分の研究の基礎にこのアプローチをおいた。第3の構造機能的なパイオニアは、英国の社会学者、ハーバート・スペンサー（1820-1903）である。スペンサーは、社会を人間の身体にたとえた。人間の身体の構造的な部分——骨格、筋肉、そしてさまざまな内臓——が相互依存的に作用して有機体全体の存続を助けるように、社会構造は協働して社会を保存する。それゆえ、構造機能パラダイムは、社会のさまざまな構造を確認し、その機能を探求することによって、社会学的観察を組織化する。

社会学が米国で発展するにつれて、コント、スペンサー、そしてデュルケムの考えの多くは、タルコット・パーソンズ（1902-1979）によって進められた。かれは、構造機能パラダイムの米国での主要な提唱者である。パーソンズは、社会をシステムとして扱い、あらゆる社会が存続のために遂行しなければならない基本的課題を確認し、社会がそれを達成する方法について確認しようとした。

ロバート・K・マートン（1910-2003）は、社会的機能の概念にかんするわれわれの理解を決定的に拡張した。マートン（1968）は、まず、人びとはめったに社会構造の機能のすべてを知覚しているわけではないことを説明した。かれは、**顕在機能**とは、社会パターンの認識され意図された結果であると述べた。これとは対照的に、**潜在機能**とは、ほとんど認識されてもいないし意図されてもいない結果である。例を挙げると、米国の高等教育システムの明白な機能は、若い人びとに仕事を遂行するのに必要な情報と技能を提供することである。ことによると、同じくらい重要なのは、それほどしばしば認識されているわけではないものの、類似した社会的背景をもつ人びとをいっしょにする「結婚ブローカー」としての大学の機能である。高等教育のもうひとつの潜在機能は、何百万もの若者を、労働市場の外部にとどめておくことである。おそらく、労働市場では、かれらの多くは仕事を見つけられないだろう。

第2に、マートンは、社会的パターンは社会のさまざまな成員に異なる影響をおよぼすと説明している。たとえば、因習的な家族は、小さな子どもに便益をあたえるが、かれらは男性に特権をあたえる一方で、女性のもつ機会は制限するかもしれない。

第3に、社会的パターンのなかには、社会の現状を支持するものもあるが、それを混乱させるものもある。マートンは、社会の作用を混乱させるであろうあらゆる社会的パターンを記述するのに、**社会的逆機能**という用語をつかった。犯罪のような混乱をひきおこすパターンは、多くの人びとから有害であると見なされている。しかし、混乱させるものが、つねに悪いとはかぎらない。少なくともすべての人の観点から見て悪いとはかぎらない。結局、米国では犯罪は大事業であり、司法システム内部で働く何百万もの仕事を供給している。

批判的評価 構造機能パラダイムの主要な特徴は、社会を安定的で秩序あるものと見なす点にある。したがって、このアプローチを用いる社会学者のおもな目標は、「なにが社会を動かしているか」を描き出すことである。

20世紀のなかごろまでは、ほとんどの社会学者は構造機能パラダイムを好んでいた。しかしながら、最近の数十年間に、その影響力は衰えた。社会の安定性と統一性に焦点をあてることによって、構造機能主義は、かなりの緊張と闘争を生み出す可能性がある社会

階級、人種、ジェンダーの不平等を無視しがちである、と批判者たちは指摘している。が、いして、闘争を犠牲にして安定性に焦点をあてることによって、このパラダイムはいくらか保守的になる。このアプローチへの批判的反応から、社会学者たちはもうひとつの方針を発展させた。社会闘争（社会的コンフリクト）アプローチである。

社会闘争パラダイム

社会闘争パラダイムとは、社会を闘争と変化を生みだす不平等な闘技場とみなす理論を構築する枠組みである。構造機能パラダイムが連帯を強調するのとは違って、このアプローチは、不平等を強調する。このパラダイムに導かれた社会学者たちは、社会階級、人種、エスニシティ、ジェンダー、そして年齢のような要因が、金銭、権力、教育、そして社会的威信の不平等な分配とどのように関連しているのかを探求する。闘争分析は、社会構造が社会全体の作用を促進するという考えを拒絶して、その代わりに、社会パターンがいかにある人びとに利益をあたえる一方で、他の人びとを剥奪するのかを指摘する。16 頁のコラムは、W・E・B・デュ・ボイスによる人種にかんする重要な貢献を強調している。

社会闘争パラダイムを用いる社会学者たちは、支配的な人びとのカテゴリーと不利な人びとのカテゴリーのあいだの進行中の闘争に注目する。富裕な人びとと貧しい人びととの関係、白人と有色人種との関係、男性と女性との関係などである。典型的には、頂点にいる人びとは自分たちの特権を守ろうとする。その一方で、不利な人びとは自分たちのためにもっと多くを得ようとする。

われわれの教育システムについての闘争分析は、学校教育がいかにして新しい各世代の不平等を再生産するかを示している。たとえば、中等教育は、学生を大学進学のための準備課程か、職業訓練課程かのどちらかに割り当てる。構造機能的な観点からは、そのような「クラス分け」は、学生の能力にかなった学校教育を提供することによって、各人に利益をあたえる。しかし、闘争分析は、クラス分けはしばしば能力よりも社会的背景と関係しており、そのため、富裕な学生はより上のクラスにおかれ、貧困な子どもはより下のクラスで終わると反論する。

こうして、特権的な家族出身の若い人びとは、最良の学校教育を受け、その後は高所得の職歴を追求する。他方、貧困家族の子どもたちは、大学進学のための準備がされず、自分たちの親がそうであったように、典型的には低賃金の仕事に入る。どちらの場合にも、ある世代の社会的地位は、つぎの世代に引き継がれる。学校は、個人の能力との関係でこの慣行を正当化するのである（Bowles and Gintis 1976; Oakes 1982, 1985）。

米国での社会闘争は、学校だけではない。本書ののちの諸章では、階級、ジェンダー、人種にもとづく不平等が、いかに社会それ自体の組織に根ざしているかを説明する。

多くの社会学者が社会闘争パラダイムを用いるのは、たんに社会を理解するためだけではなく、不平等を減少させるような社会変動をもたらすためである。これは、W・E・B・デュ・ボイスの目標であり、カール・マルクスの目標でもあった。マルクスの著作は、社会闘争パラダイムの発展にとって、とくに重要であった。マルクスは、社会を分析することだけを求める人びとに我慢がならなかった。よく知られた言明（ロンドンのハイゲート墓地にある墓碑に刻まれている）で、マルクスは「哲学者たちはたださまざまに世界を

解釈してきただけであった。しかし、重要なことは、世界を変革することである」と主張した。

批判的評価 社会闘争パラダイムは、最近の十年間に多くの追従者を得た。しかし、他のアプローチと同様に、批判も受けてきた。このパラダイムは不平等に焦点をあてているので、それはがいして共有された価値と相互依存性が、いかに社会の成員を統合しているかを無視している。くわえて、このパラダイムが政治的目標を追求するかぎり、科学的客観性へのいかなる要求も失うと、批判者たちは言う。しかしながら、第2章（「社会学的調査研究」）で説明するように、あらゆる理論的アプローチは、政治的な帰結——異なるとはいえ——をもたらすと、闘争理論家は反論する。

構造機能パラダイムと社会闘争パラダイムの双方にかんする最後の批判は、それらが社会を、「家族」「社会階級」「人種」などとの関連で、大雑把に描いていることである。第3の理論的パラダイムは、社会を大きな社会構造との関連で描くよりも、日常的な経験として描くものである。

コラム:多様性——人種、階級、ジェンダー——*****

初期のパイオニア——デュ・ボイスの人種論



<http://www.bolender.com/Sociological%20Theory/Sociological%20Theorists.htm>

米国における社会学のパイオニアのひとりであるウィリアム・エドワード・バーハート・デュ・ボイスは、社会学を、無味乾燥な学問分野とは考えなかった。それとは反対に、かれは社会学をかれの時代の差し迫った問題、とくに人種の不平等を解決するためにつかいたかった。

デュ・ボイスは、人種的分離に反対する意見を述べ、全米黒人地位向上協会（NAACP）の創立メンバーとして働いた。かれは、社会学における同僚——そしてあらゆる場所の人びと——に米国における深刻な人種分裂を理解するように援助した。白人は、たんに「アメリカ人」でありうると、デュ・ボイスは指摘した。しかしながら、アフリカ系アメリカ人は、「二重意識」をもっており、そこに肌の色にもとづく自己確認から逃れることのできない市民としての地位が映し出されている。

かれの社会学的古典である『フィラデルフィアにおける黒人——社会的研究』（1899）で、デュ・ボイスは、フィラデルフィアのアフリカ系アメリカ人コミュニティを研究し、圧倒的な社会問題ととりくむ人びとの強さと弱さを確認した。かれは、黒人は劣っているという普及している信念に戦いを挑み、アフリカ系アメリカ人の問題を白人の偏見によるものであるとした。かれの批判は、成功した黒人にも及び、かれらは白人による受け入れを勝ちとるのに熱心なあまり、かれらの助けを必要としている黒人コミュニティとの結び

つきを放棄したと批判した。

デュ・ボイスは、人種は 20 世紀の米国が直面している主要な問題であると述べた。かれの経歴の初期には、かれは人種の分裂を克服することに楽観的であった。しかし、晩年には、かれはもっと厳しくなり、ほとんど変わっていないと信じていた。93 歳で、デュ・ボイスは米国を去ってガーナに移った。そこでかれは 2 年後になくなった。あなたは、デュ・ボイスのように、人種は 21 世紀においても主要な問題であると思いますか。

シンボリック相互作用パラダイム

構造機能パラダイムと社会闘争パラダイムは、マクロ水準の方針を共有している。マクロ水準とは、社会全体をかたちづくる社会構造に幅広く焦点をあてることを意味している。マクロ水準の社会学は、大きな図を描くもので、ヘリコプターに乗って高いところから都市を観察し、高速道路がどのように人びとの場所の移動を助けているか、富裕な近隣地区と貧困な近隣地区で住宅がどのように異なっているかを見るようなものである。社会学はまた、ミクロ水準の方針ももっている。ミクロ水準とは、特定の状況における社会的相互作用に近接した焦点をあてることである。このやり方での都市生活の探求は、街頭のレベルで生じる。そこでは、調査研究者は、子どもたちが学校の遊び場でどのように相互作用しているのか、歩行者はバス乗り場でどのようにして待っているのか、あるいはきちんとした身なりの人びとは、ホームレスにどのような反応をするのかを観察するだろう。それゆえ、シンボリック相互作用パラダイムは、社会を諸個人の日常的な相互作用の産物とみなす理論を構築する枠組みである。

「社会」は、何千万もの人びとの進行中の経験から、どのような結果をひきだすのであろうか。第 6 章（「日常生活における社会的相互作用」）で説明するひとつの答えは、社会とは、人びとがたがいに相互作用するなかで構築される共有された現実以外のなにものでもないということである。すなわち、人間は、シンボルの世界に住む生き物であり、ほとんどすべてのものに意味を付与している。それゆえ「現実」とは、たんにわれわれが、自分たちをとりまく環境、他者にたいする義務、そしてわれわれ自身のアイデンティティをどのように定義しているかということにすぎない。

もちろん、この定義の過程は主観的なものであり、人によって異なっている。たとえば、ホームレスの男を「施しものを探している怠け者にすぎない」と定義して無視する人もいるかもしれないが、困窮している仲間とみなして援助を提供する人もいるかもしれない。同様に、管轄区域を巡回している警察官とすれ違うことで、安全を感じる人もいれば、神経質な不安やあからさまな怒りにとらわれる人もいるかもしれない。それゆえシンボリック相互作用アプローチを採用する社会学者は、社会を複雑で、つねに変化している主観的意味のモザイクとみなす。

シンボリック相互作用パラダイムは、マックス・ウェーバー（1864-1920）の考えに根ざしている。かれは、ドイツの社会学者で、環境をそのなかにいる人びとの観点から理解する必要があると強調した。ウェーバーのアプローチは、第 4 章（「社会」）で論じる。

ウェーバーの時代から、社会学者たちは、ミクロ水準の社会学を多くの方向にむけた。

第5章（「社会化」）では、ジョージ・ハーバート・ミード（1863-1931）の考えを議論する。かれは、われわれがどのようにして自分たちのパーソナリティを社会的経験から築いているかを探求した。第6章（「日常生活における社会的相互作用」）では、アービング・ゴフマン（1922-1982）の研究を提示する。かれのドラマトウルギー分析は、われわれがいかにか、舞台の上でさまざまな役割を演じる俳優に似ているかを述べている。そのほかに、ジョージ・ホマンズとピーター・ブラウをふくむ現代の社会学者たちは、社会的交換分析を発展させた。かれらの見方においては、社会的相互作用は、各人が他者からなにを獲得したり失ったりする立場にあるかによって導かれる（Molm 1997; Mulford et al. 1998）。たとえば、コートシップ〔求愛〕の慣習において、人びとは、少なくとも自分自身が提供しなければならないのと同じくらいのもの——身体的魅力、知性、富などとの関連で——を提供する相手を探す。

批判的評価 社会的相互作用パラダイムは、社会へのマクロ水準のアプローチに見いだされる歪みのいくつかを修正する。シンボリック相互作用パラダイムは、「家族」や「社会階級」のようなマクロ水準の社会構造の存在を否定せずに、社会とは基本的には相互作用する人びとであることを思い起こさせてくれる。すなわち、ミクロ水準の社会学は、いかにして諸個人がじっさいに社会を経験するのかを伝えようとする。このコインの反面として、シンボリック相互作用パラダイムは、日常的な相互作用に焦点をあてることによって、より大きな社会構造、文化の影響、階級、ジェンダー、人種のような要因を無視している。

表 1-1 は、構造機能パラダイム、社会的闘争パラダイム、そしてシンボリック相互作用パラダイムの主な特徴について要約したものである。各パラダイムは、特定の種類の問題に答える助けになる。しかしながら、社会の完全な理解は、3つの社会学的視点すべてを用いることから得られる。以下の米国におけるスポーツの分析で、このことを示そう。

パラダイムを適用する——スポーツの社会学

米国の人びとはスポーツを愛好している。ほとんどの若い人が団体スポーツにかかわっているだけでなく、若い人にとっても高齢者にとっても、テレビはスポーツ・イベントに満ちており、毎日のニュース・メディアは、定期的にスポーツの成績を報道している。マーク・マックガイア（野球）、タイガー・ウッズ（ゴルフ）、セレナ・ウィリアムズ（テニス）のような米国で目立っているプレイヤーは、最も有名な選手である。全体として、米国のスポーツは数十億ドルの産業である。3つの理論的パラダイムは、この日常生活の身近な一部に、どのような社会学的洞察をもたらしてくれるのだろうか。

スポーツの機能

構造機能的アプローチは、スポーツが社会の作用をどのように助けるかに注意を向ける。それらの顕在機能には、レクリエーション、健康づくり、比較的無害な「ガス抜き」を提供することがふくまれる。スポーツには、社会関係を育てることから数万の仕事を生み出すことまで、重要な潜在機能もある。ことによると、最も重要なのは、スポーツが競争と成功の追求を奨励していることである。これは双方とも、われわれの生活様式の核心にあ

るものである。

スポーツには、逆機能的な結果もある。たとえば、大学は優勝チームをつくる意図で、ときとして、学問的な適性よりも運動能力によって学生を入学させる。この慣行はその学校の学問的な標準をさげるだけでなく、学問研究にほとんど時間をつかうことのできない運動選手を不公平に扱うことにもなる (Upthegrove, Roscigno, and Charles 1999)。

スポーツと闘争

社会闘争分析は、スポーツが社会的不平等と密接に関連しているという指摘からはじめる。スポーツのなかには、テニス、水泳、ゴルフ、ヨット、スキーをふくめて、費用がかかり、そのため富裕な人びとに参加が限られるものもある。しかし、フットボール、野球、バスケットボールは、あらゆる所得水準の人びとにとって近づきやすい。要するに、人びとがする種目は、選択の問題だけではなく、社会的立場を反映している。

歴史をつうじて、スポーツは基本的に男性志向であった。たとえば、1896年に開催された第1回近代オリンピックは、女性を競技から排除した。米国では、全国ほとんどの地域で、リトル・リーグのチームでさえ、最近まで少女にプレーをさせなかった。こうした排除は、少女と女性はスポーツをする力とスタミナがないか、スポーツをすると女性らしさが失われてしまうという正しくない観念によって弁護されてきた。それゆえ、われわれの社会は、男性が運動選手になることは奨励しても、女性は思いやりのある観客とチアリーダーであることが期待されている。こんにち、ますます多くの女性がこれまで以上にプロスポーツをしている。しかし、彼女たちは、男性の後ろの席に座りつづけており、とくに最も稼ぎが多く社会的威信の高いスポーツの場合にそうである。

われわれの社会は、長いあいだ有色人種を大リーグのスポーツから排除してきたけれども、プロスポーツにおいて高所得を獲得する機会はこの数十年のあいだに拡大してきた。メジャー・リーグの野球が最初に、アフリカ系アメリカ人の選手を認めたのは、ジャッキー・ロビンソンが1947年に、人種の垣根を越えてブルックリン・ドジャーズに加わったときである。50年以上たってから、プロ野球はすべてのチームで、ロビンソンの伝説的な背番号42を欠番にした。そして、2000年に、アフリカ系アメリカ人(米国人口の12パーセント)は、メジャー・リーグの選手の13パーセントを数え、プロフットボール・リーグ(NFL)の選手の67パーセント、プロバスケットボール協会(NBA)の選手の78パーセントを占めている (Center for the Study of Sport in Society 2001)。

プロスポーツでアフリカ系の人びとの割合が増加したひとつの理由は、運動成績が、打率や一試合あたりの得点数によって正確に計られるので、人種的偏見によって影響をうけないからである。有色人種のなかにとくに運動で秀でる努力をしている人がいるというのも、本当である。運動には、他の職業よりも大きな機会があるとかれらは認識している (Steele 1990; Hoberman 1997, 1998; Edwards 2000; Harrison 2000)。事実、近年では、アフリカ系アメリカ人の運動選手は、平均して、白人の選手よりも高い俸給を得るようになった。

しかし、人種差別はまだ米国のスポーツの汚点となっている。ひとつには、人種はフィールドにおいて、「スタッキング」と呼ばれるパターンで、運動選手がプレーするポジションと結びついている。図1-2は、フットボールにおける人種の研究結果を示している。

白人選手はオフェンスで優勢であり、ラインの両サイドの中心ポジションでもプレーしている。もっと広く見ると、アフリカ系アメリカ人が圧倒的に多いのは、五種目のスポーツにおいてだけである。野球、バスケットボール、フットボール、ボクシング、そしてトラック競技である。すべてのプロスポーツにわたって、スポーツチームのマネージャー、ヘッドコーチ、オーナーの大多数は、白人である (Gnida 1995; Smith and Leonard 1997; Center for the Study of Sport in Society 2001)。

われわれは、だれがプロスポーツから最も利益を得ているかを問うてもよいだろう。個々の選手は天文学的な俸給を得ており、何百万ものファンが好みのチームを追っかけて楽しんでいるけれども、スポーツは大きなビジネスであり、少数の人びと（とくに白人男性）のために利益を生み出す。要するに、米国のスポーツは、ジェンダー、人種、そして経済力にもとづく不平等と結びついているのである。

相互作用としてのスポーツ

ミクロレベルでは、スポーツ・イベントは対面的相互作用の複雑なドラマである。ひとつには、プレーは選手に割り当てられたポジションとゲームの規則によって導かれている。しかし、選手は自発的で、予測しがたいものでもある。それゆえ、シンボリック相互作用パラダイムに教えられて、われわれはスポーツをシステムというよりも進行中の過程として見る。

この観点から、われわれはまた、各選手がゲームをいくらか異なって理解していると期待する。厳しい競争環境で戦っている人もいれば、勝利の欲求よりも試合が好きな人もいるかもしれない。

競争への異なった態度とはべつに、チームのメンバーはまた、自分たちが試合に持ち込むさまざまな偏見、嫉妬、野心にしたがって、特定のリアリティをかたちづくっている。また、どのひとりの選手の行動も、時間とともに変わるかもしれない。たとえば、プロ野球の新人は、ビッグ・リーグの最初の数試合のあいだじゅう、自意識過剰であるかもしれない。しかし、時がたつにつれて、ほとんどの選手はチームになじむ。フィールドでくつろげるようになることは、ジャッキー・ロビンソンにとって時間のかかる辛いことであった。かれは、多くの白人選手と何百万の白人ファンが、かれの存在を不快に感じていることを知っていた。しかし、時がたつにつれて、かれの並外れた能力と自信に満ちた協力的な態度のおかげで、国中の尊敬を勝ちとったのであった。

3つの理論的アプローチ——構造機能パラダイム、社会闘争パラダイム、そしてシンボリック相互作用パラダイム——は、異なる洞察をもたらす。しかし、どれも他のものより正しいというわけではない。どのような問題に適用する場合でも、各パラダイムは独自の解釈を生み出す。社会学的視点の力を完全に評価するためには、この3つすべてをよく知るようになるべきだ。これらがいっしょになって、討論と論争を刺激する。最後のコラムで、われわれは、社会学の一般化が平凡なステレオタイプとどう違うのかを問うことによって、この章で提示した考えの多くを吟味する。

社会学はステレオタイプ以上のものか？

「プロテスタントは、自殺する人びとである」

「アメリカ国民？ かれらは豊かで、結婚するのが好きで、離婚するのも好きである」

「だれもが、プロ・バスケットボールをやるなら、黒人でなければならないことを知っている」

社会学者をふくめて、だれもが一般化を好んでいる。しかし、社会学の初学者は、一般化がステレオタイプとどのように違うのだろうかと思ふに思ふ。たとえば、冒頭の言明は、一般化のように聞こえるのか、それともステレオタイプのように聞こえるのか。

これら 3 つの言明は、**ステレオタイプ**の例である。ステレオタイプとは、あるカテゴリーのすべての人びとに当てはめられる誇張された記述である。第 1 に、各言明は、平均を記述するよりも、あるカテゴリーに属するすべての個人を同じ仲間とみなす。第 2 に、各言明は、事実を無視し現実を歪めている（たとえ多くのステレオタイプが真実の要素をじっさいにふくんでいるとしても）。第 3 に、ステレオタイプは、公平な主張というよりは、「悪口」に近い。

これとは反対に、良い社会学は、一般化をふくんでいる。ただし、それには 3 つの重要な条件がある。第 1 に、社会学者は、どのような一般化も不注意にすべての個人に当てはめるようなことはしない。第 2 に、社会学者は、一般化は利用可能な事実と一致していることを確かめる。第 3 に、社会学者は、真実に到達するという関心から、公正に一般化を提供する。

本章の最初に、われわれはプロテスタントの自殺率がカトリックやユダヤ教よりも高いと述べた。しかし、「プロテスタントは自殺する人びとである」という言明は、理にかなった一般化ではない。なぜなら、プロテスタントの大多数は自殺しないからである。さらに、特定の友人に、かれがプロテスタントの男性であるという理由で、自殺寸前であると考えことは誤っている。（たまたまバプティストであるルームメイトに「うーん、自殺のリスクを考えると、金を返してもらえないかもしれないね」といって金を貸すのを断ることを想像してみよ）。

第 2 に、社会学者は自分たちの一般化を、利用可能な事実からつくる。このコラムの最初にある第 2 の言明をもっと事実在即したかたちに変えたものは、平均して、そして世界的な標準から見て、米国民は生活水準がとても高いというものである。われわれの婚姻率が世界の最も高い部類に入ることも真実である。そして、喜んで離婚する人は少ないだろうが、われわれの離婚率が高いことも真実である。

第 3 に、社会学者たちは、公正であろうと努力している。すなわち、かれらは真実への情熱に動機づけられている。アフリカ系アメリカ人とバスケットボールにかんする第 3 の言明は、ふたつの理由から良い社会学ではない。第 1 に、それはたんに真実ではない。第 2 に、それは真実を探求するよりも偏見に動機づけられている。

良い社会学は、有害なステレオタイプ化からは距離をおく。しかし、社会学の授業は、ありふれたステレオタイプについて話すすぐれた環境である。教室では、議論が奨励され、特定の主張が正確であるのか、たんなるステレオタイプであるのかを、あなたが決定するために、事実にかんする情報が提供される。

討論をつづけよう。

1. 米国の人びとは、社会学者についてのステレオタイプをもっているだろうか。それはどのようなものか。それらは妥当なものなのだろうか。
2. 社会学の授業をとることは、人びとのステレオタイプをぬぐい去ることになると思うか。またそれはなぜか。
3. 社会学が挑戦するあなた自身のステレオタイプを挙げなさい。
